

# 批評・紹介

Terry Allen

*Timurid Herat*

安藤志朗

アフガニスタン北西部の一都市ヘラートは、古くはアヴェスタに Haraēva と記録され、あるいはアレクサンダー大王が建設したという傳説もある、極めて古い歴史を持つ名邑である。十世紀のアラブの地理學者らは、ヘラートに、各邊の中央に門を一つずつ持った、カーディナル・ポインツに位置する方形の城壁が存在したことを傳えている。<sup>(1)</sup>この城壁は、東門から西門へ、北門から南門へと通ずる二筋の道が城壁内中心部で交差し、城壁内を均等に四つに區分するという基本プランを維持しつつ、二十世紀初頭に至るまでヘラート・オアシスの都市核でありつづけた。現在新市街の西にある東西一三五〇メートル、南北一四五〇メートルの城壁跡はそれである。

このヘラートが都市として空前絶後の發展を遂げ、東方イスラム世界の政治・文化の中心であったのは十五世紀ティムール朝時代のことである。都市化ということがすぐれて歴史的な社會文化現象であることは言うまでもない。されば、當時のヘラート・オアシス内での社會文化の諸組織（政治・自然・社會經濟・資源・人口等）を統合的秩序として捉え、その網の目の中でヘラートの成長因を追求することは、少なからずティムール朝に關する理解の深化に貢獻す

るはずである。しかしながら、從來十五世紀のヘラートを論じた二人の研究者は、このような視點を自らの論考に投影することはなかった。すなわち A・M・ベレニツキーは様様なモニュメント——モスク・マドラサ・バーク（庭園）等——に關する情報を、同時代史料から抽出・引用し、十五世紀のヘラートの景觀を再構成しようと試みた。<sup>(3)</sup>彼の論述は現在でも有用な一面を持つが、所詮は景觀的部分的なスケッチの寄せ集めであり、都市史の研究としては未熟な段階にとどまっている。また A・Z・V・トガンは、古代から近世までのヘラート史を *Islam Ansiklopedisi* に十三ページにわたって綴る中、六ページをティムール朝時代にあて、各モニュメントについて、十九世紀のヨーロッパ人の記録と同時代史料を断片的に引用しつつ言及した。しかしこれとて、總合的視野から景觀を分析するまでには至っていないのである。

さて今ここに紹介する T・アレンの手になる *Timurid Herat*（ティムール朝期のヘラート）は、十五世紀のヘラートの景觀を可能な限り再構築・分析し、更に社會經濟の面からもアプローチを試みたものであり、ヘラート史の研究かつティムール朝史の研究において白眉とも言うべき成果である。

本書の意圖はその序文（七八頁）において述べられているが、その意圖を讀者が正しく理解するためには、本書に先行する著者のいま一つの業績をふまえておく必要がある。それは *A Catalogue of the Toponyms and Monuments of Timurid Herat* (Cambridge, Mass., 1981) と題されたもので、この中で著者は十五世紀のヘラートに存在したと史料が語るあらゆるもの（村落・建造物・水路・パーザール等）の名稱と各各に關する情報を網羅し、更に個

個に番號を附して附録の地圖上にその番號を位置づけるという、位置の比定をも行なっている。このカタログは、同時代史料、十九・二十世紀にヨーロッパ人が残した地圖・寫眞、そして著者自身による足かけ三年（一九七六—七八）に亙る現地調査の三つを情報源としており、我々はこのカタログにおいて、十五世紀のヘラート史研究の實證的な基礎作業が既になされているのを見る。著者は、このカタログ作成以後に本書を執筆することの意圖として、次のように述べる。「このカタログと地圖は、しかしながら、今一つ不明瞭な諸事實を含んでいる。この論考はそれらの事實を包括的な形で述べ、それらがヘラートの都市史や文化的脈絡との關連においてどのように理解され得るか、を示すことを意圖した」と。このような意圖の下に、著者は具體的な考察を本書を構成する主要な四つの章、「地勢と歴史 Landscape and History」（二頁—一六頁）、「發展の年代史 Chronology of Development」（一七—三五頁）、「社會と經濟 Society and Economics」（三六—四五頁）、「ティムール朝とヘラート Timurids and Herat」（四六—五五頁）の中で順次展開させてゆく。以下に各章の要點を紹介してゆきたいと思う。

「地勢と歴史」——この章の最初一ページに、ヘラートの地勢上の位置附けが①交易路と②水利という二つの要素から説明されている。

①ヘラートは、交易の障害であるヒンドゥー・クシュ山脈に對し最も東寄りに開けた、ハリー・ルード（ヘラート川）流域の廣大なオアシスである。それ故、カーブル以西において北部イラン・トルキスタン方面からカンダハル・インド方面へ向かう者が、必

ず通過せねばならない南北ルート上に位置する。

②ヘラートは灌漑するに十分な面積を有する平野である。また、雨の少ないヘラートの氣候は人爲的な水の供給が必要である。ゆえにヘラートはハリー・ルードから引かれた幾つかの水路によって廣い範圍にわたって灌漑されるべき場所に位置する。

著者は①と②とを述べた後②の方を重要視し、「これらの水路の位置がオアシス内の居住景觀において、唯一、最も重要な要素である」と述べている。卓見である。尙、續いて著者は、方形の城壁の北方にあって西流する *Gūiye Engīl* と更に北にあって同じく西流する *Gūiye Nou* という二本の水路に言及し、各々が灌漑する二つの區域 (*boluk* *lit. bölük*)、すなわち *Boluk-e Engīl* と *Boluk-e Hyabān* とを特記している。その際、各各の區域の地圖上の區分として、前者を *Gūiye Engīl* 以南の城壁に近接する地域、後者を二つの水路の間の地域としているが、この見解には若干檢討の餘地が残っているように思われる。最近、ハーフィズ・アブラーの地理書の内、ホラサンの部分のドイツ語譯註を公刊した D・クラウルスキーは、ヘラートにある十の區域を圖上に整然と區分することを試みており、それと著者の見解とを比較すると兩者の間に相異があるのに氣づく。

ヘラートの通史に關しては、イスラム以前から現代までの平明な略述にとどまっている。が、その中にあってヘラートの最古の都市プランについては、ユニークな新説を唱えている。それは、最古のヘラートは直徑八五〇メートルの圓形の城壁で圍まれた圓形都市であり、方形の城壁は圓形の城壁に南接する形で後世に附加されたものである、という見解である。著者はこの見解を支持する物的證據

として、(i)方形城壁の北面外側に残存する略圓形の道筋こそ、圓形城壁の痕跡である、(ii)方形城壁の北面の不規則なラインは、圓形城壁が接していたことの名残りである、(iii)方形城壁の北面にある二つの門は、圓形城壁との結接点であったことを示す、という三點を擧げる。これらの點に關しては、現地調査のかなわぬ評者としては、幾つかの疑問點を述べておきたい。

まず(i)について。O・v・ニードナーメヤーの作成した方形城壁北面部分の地圖を参照しても、著者の考えるような略圓形の筋道をもつ道路を見出すのは困難である。假にそのような道路が存在したとしても、それを古代の城壁跡とする積極的な理由にはならないと思う。

(ii)について。その可能性は否定できない。が、積極的な理由にならないのは(i)と同じである。

(iii)この解釋が成立するには、方形城壁が建造された當初から、その北面には二つの門がなければならぬ。北面の東寄りに門が一つ増え合計五つの門が記録されるようになるのは、早くとも十三世紀のことである。<sup>(7)</sup>先述の如く、十世紀のアラブの地理學者は、十三世紀を四つと數えていた。著者は、四つと數えられた理由として、この北面東寄りの門(ティムール朝時代キプチャク門の名でよばれた)が城壁内のバーザールや、東西・南北を貫く基軸路に直接通じていなかったため、もれてしまったと説明しているが(カタログ 三六頁)、いささか牽強附會の感がしないでもない。

このように考えると、ヘラートの最古の都市プランに關する著者の見解は確かに獨創的ではあるが、文獻による圓形城壁の存在の立證が困難である點、物的證據も確かな裏付けにはなりえないという

點で、説得力に乏しいように思われる。

「發展の年代史」——この章ではまず、十五世紀にヘラートを國都としたティムール朝の主な君主達の各治世において、いかなるモニュメントがいつ、どこに造られていったかが詳細に述べられる。讀者は卷末の四葉の地圖を参照しながら、第十五世紀、百年というタイム・スパンにおいて、ヘラートが圖上にどのような軌跡を描きつつ發展していったかを知ることができる。いま、著者の述べるヘラートの發展の軌跡を、シャー・ルフ、アブー・サイード、スルタン・フサインという代表的な三人の君主の治世毎に順次辿ると、大略以下の如くなる。

シャー・ルフの時代(一四〇五—一四四七)。その初期は、ティムールの破壊した城壁、城塞(Qal'eye Eshqer ad-Din と呼ばれ、北面の二つの門の間に位置する)や城壁内のバーザールの修復がなされた。その後、Hyabad(大通り——城壁内の南北の基軸路が、城壁北面の中央やや西よりにあるマリク門を通過して北郊へ直線コースをとる道)沿いに、モスク、マドラサ、ハンガーフ、マザール、病院等が並び立つに至った。その中には、この治世のシンボリックな建造物である、ガウハル・シャード(シャー・ルフの妃)のモスクとマドラサが含まれる。もっとも著者は、この時代の都市部は依然、HyabadがÇifte Engil と交わる地點より以南に限られる大勢であったと見なしている。また、シャー・ルフの居所となったバークについては、彼が城壁内の Bağ-e Şah から城壁外の Bağ-e Zagan に移動した時期をヒジュラ暦八二二年から八一四年(一四〇九/一〇年から一四一一/一二年)の間と推定している

點、あるいは A・Z・V・トガンが誤った位置に比定した Bige Seifd を圖上に正しく位置づけている點など、注目すべき見解が呈示されている。

アブー・サイードの時代（一四五八—一四六九）。アブー・サイードは、比較的短い治世であったため顯著な都市化はもたらさなかった。しかし城壁の東北約五・五キロの地點にある Gazorgah の高臺附近からその西方の山腹にかけて彼が開墾させた Ġuīye Solfani という水路は、後にこの山腹一帯の開発を促し、都市部の擴大を最大限にもたらしたという點で、十五世紀ティムール朝期の傑出した成果であったと説明される。この水路については、從來のいかなる研究者も言及しておらず、讀者は著者の指摘によって初めてその重要性に氣づかされる。

スルタン・フサインの時代（一四七〇—一五〇六）。ヘラートは政治、文化の中心として繁榮の頂點に達した。スルタン・フサイン、宰相アリー・シールらによってなされた建造事業は、シャー・ルフ時代のそれを遙かに凌いだ。著者は、この時代、建造物が集中した二つの地域を指摘する。一つは Ġuīye Engīl 以北から Ġuīye Solfani が潤す北郊の山腹に至る帶狀の地域、こま一つは Hiyaban に沿う地域である。前者に屬す Gazorgah の高臺から西へ續く山地帯及び Gazorgah の南西のスロープ地帯には、タフトとよばれる高みやバグが設置された。一方後者はシャー・ルフの時代から開發がすすめられていた地域であったが、この時代その開發は更に北へと伸長した。沿道にはスルタン・フサインのマドラサ、ハンガーフや、アリー・シールによって建造された Ehlasiye と呼ばれる宗教的建造物のコンプレックスに代表される數々の建造物が林立

し、Hiyaban の姿を浮かび上がらせた。

こうして十五世紀のヘラートの發展をクロノロジカルに整理した後、著者は集中的に開發の進んだ Hiyabān 沿道と Ġuīye Engīl 以北の帶狀地帯の二つの地域の性格づけを以下の如く試みる。

Hiyaban は、北方からヘラートへ流入してくる交易路の唯一の主要幹線であり、南に下れば城壁内中心部の Qahar Su と呼ばれる市に至る。さらにそれより南へはカンダハル、インドへのルートに直結しており、Hiyaban は經濟上の動脈としての役割を荷っていた。また Hiyaban の北方にある 'Idgah が、ヘラートの人びとの宗教上の集會所であったため、參道としての役割をも荷った。これら二つの役割を負うため、Hiyaban はヘラートの商業と人びとの生活に密接に結びついた、甚だ公的な性格を帯びた。

一方、バグやタフトの設置された Ġuīye Engīl 以北の帶狀の地域については、それらバグやタフトが史料中では、王子、貴顯の名を帯びていることから、この地域の大部分が王室の私有地、もしくは君主の寵愛を享受した人物の土地であり、プライベートな性格を帯びていたと結論づけている。

この章は、著者の知見が見事に結實した箇所であり、讀者はこの成果をほぼ正確なものとして享受できる。とりわけ、ティムール朝時代のヘラートの發展において、Hiyaban がその基軸的存在であったことを初めて明確な形で論證した意義は大きい。何故なら、ベレニッキはこの Hiyaban については史料の引用の域を出ず、トガンに至っては Ġuīye Nou に沿った道を Hiyaban にあて、實際の位置に對して九〇度ずれた形で圖示するという致命的な誤りをおかしているのである。

「社會と經濟」——この章では、ティムール朝時代かくも多くの建造物が林立するに至った事實の背景に横たわる、社會經濟的なシステムについて述べられる。著者の見解によれば、そのシステムは、ワクフ（寄進）を媒介とした、ウラマーとトルコ人貴族（君主やアミール）との共生關係に求められる。いま、この共生關係が成立するプロセスを著者の述べるところに従って辿ると、次のように要約できよう。

このプロセスの前提にあるのは、「ヘラートの繁榮は、その肥沃なオアシス及びバードギースの丘陵の牧地で営まれる自然經濟によつて説明することが出来」、「交易は、農業とは對照的に、ティムール朝の經濟にとつてさしたる役割は持たなかった」（三七頁）という主張である。この前提に立つと、ヘラートに居住するウラマーもトルコ人貴族も共にヘラート・オアシスからあがる富に依存せねばならない。その際生ずるのは、兩者間での平和的な富の分配という問題と、その分配において大きなマイナス要因となる課税を如何に回避するかという問題である。そこでこの二つの問題を同時に解決するべく採られた手段が、免稅保證のあるワクフである。すなわち、トルコ人貴族は、富の分配機構に取りくまれその物質的な構成要素であるマドラサ、ハンガーフ等をワクフとすることによつて、またウラマーはそれらが寄進されることによつて、共に免稅權を得、利益を分配するという圖式が成立するといふのである。

右の如き著者の見解は、著者自身が地勢を述べるにあたつて言及したヘラートの持つ交易という經濟的側面を度外視している點、あるいはトルコ人貴族に關わる遊牧經濟という側面を検討していない點など、根本的な問題を抱えているように思われる。また、實證さ

れ得ない箇所も多いように思う。しかし、他人の業績を批判するのは容易なことである。著者も指摘するように、ヘラートに關わるティムール朝史は未だ政治史のアウトラインを敘述する域を出ず、社會經濟史はなおざりの狀況である（三七頁）。そういつた中で、不完全ではあるがともかく社會經濟史の論理設定にまで立ち入った著者の試みは、その獨創性において積極的に評價できよう。

「ティムール朝とヘラート」——この章では、ティムール朝がヘラートに加えた独自の景觀とは結局いかなるものであつたか、という問題について論じられる。すなわち、歴史的なコンテキストの中で、ティムール朝のヘラートに對する獨自性を明確にしようとする試みである。

著者はこの考察にあたり、ヒジュラ曆八六一年（一四五六／五七年）、すなわちティムールの四男シャー・ルフの系統の一族がヘラートの支配權を失つた年を、ヘラートの景觀が變容するターニング・ポイントであつたとする。このポイントの設定に基づけば、八六一年以前は前代のクルト朝時代からの傳統的な景觀上のボタンを踏襲した時期であつた。すなわちシャー・ルフは、居所の周圍にハンガーフ、マドラサといった宗教的建造物を建て、居所を中心としたアンサンブルを形成するクルト朝以來のボタンを、Bagé Sarh から Bagé Zāghān へと自らの居所を移した後も維持しつづけた。一方八六一年以後は、ヘラート土着の傳統的ボタンとの訣別の時代であつた。著者はそれを顯現する例證として、アリー・シールの建てた Eblasiye のコンプレックスとスルタン・フサインの居所 Bagé Gahan Arāi とを挙げ、前者のプロトタイプはイル＝ハン國の

宰相ラシード・ウッディンがタブリーズの郊外に建てた Rob'e Rasidi に見られ、後者のそれはティムールの居所であったシャフリ・サフズの Aq Sarāy であるという興味深い主張する。とりわけ Big'e Gahan Arāi にいって、それが Big'e Zāgan とは對照的に、モスクやハンガーフなどの林立する Dihān とは切り離された存在であったことが強調される。また、フブー・サイードが開鑿した Gu'ye Solāni に沿って、北郊の山腹に設置されたバードグとタフトは、そこから見下ろすヘラート・オアシスの眺望を意圖したものであり、このような眺望を意圖した計劃的な企ては「ティムール朝以前の東方イスラム世界では、前例のない革新的なこと」(五四頁)であるというユニークな見解を述べている。

以上、本書の主要な四章の紹介を行なった。この後、appendix (五六―六二頁)には充實した文獻解題が附せられている。蛇足ながら、史料として陳誠・李通『西域番國志』も附け加えることが出来よう。また巻末の、六七八項目に及ぶ地名・モニュメントのリスト(六三―七九頁)、ビブリオグラフィ(八二―九一頁)も利用に便なるところ多大である。

本書を通じて言える第一の特徴は、周到な情報収集の上に打ち立てられた著者の様様な獨創的見解であり、最大の價值は、それら獨創的な見解が、讀者に、ティムール朝社會というものの理解の深化を促す契機を提供する點、すなわち啓蒙書たる點にある。本書が今後のティムール朝史の研究に投げかける波紋は、決して小さくはない。

## 註

- (1) al-Isfahānī, Abū Ishāq Ibrāhīm: *al-Masālik wa al-mamāzīl*, ed. M. J. De Goeje, Leiden, 1967, s. 263—267.
- (2) この箇所は、新波義信「宋都杭州の商業核」『中國近世の都市と文化』同朋舍 昭和五十九年・三五頁の語彙を部分的に拝借した。
- (3) A. M. Беленицкий: "Историческая топография Герата XV в.," *Алтыер Наову. Сборник статей*, Москва-Ленинград, 1946, стр. 175—202.
- (4) A. Z. V. Togan: "HERAT" *İslam Ansiklopedisi* 5. cilt, İstanbul, 1977, s. 429—442.
- (5) D. Krawulsky: *Horāsan zur Timuridenzeit nach dem Tārīh-e Hāfez-e Abru*, II. *Übersetzung und Ortsnamenkommentar*, Wiesbaden, 1984, Karte 2.
- (6) H. Gaube: *Iranian Cities*, New York, 1979, p. 37; M. Shokoobi: "The Monuments at the Kuhandiz of Herat, Afghanistan," *JRAS* No. 1, 1983, p. 8.
- (7) Seit b. Moḥammad b. Ya'qub al-Haravī: *Tārīh nāme-ye Herāt*, ed. Moḥammad Zobeir as-Siddiqī, Calcutta, 1944, s. 712, 713.

一九八三年 Wiesbaden, Ludwig Reichert Verlag  
B 5 版 九五頁 三八マルク